

# クレナイヨモギ の 夜

赤井都

隣の家に救急車が止まった。芽ちゃんが担架で乗せられていく。

「何があつたんですか」

前の肩をつかんだら、老婆が振り向いた。

「芽ちゃんね、心臓が熱くなる病気で命が危ない。病院に行つたつて無駄さ。明日の朝までに、クレナイヨモギが一枚ありさえすればいい。胸に貼れば何でも直る。でも、クレナイヨモギが生えている場所は、どこにもないんだよ」

「僕がどこにもない場所へ取りに行きます」

「クレナイヨモギの原は、角鹿たちに護られている。それでも行くのかい」

「行きます」

僕は玄関の前において、周りにはもう誰もいなかった。扉を開けたとたん、心が先に飛び出した。扉を何枚も何枚も過ぎた。夜空とクレナイヨモギが広がる原へころんと出た。平たい葉がしんと沈む。一枚ちぎると、夜気をついて鮮烈な香りが広がる。地響だ。鹿たちが追ってくる。扉を幾枚も超え、部屋に戻る瞬間、背後から胸を貫かれた。扉ごしに角鹿が透徹した声で言う。

「このままではお前が死んでしまう。クレナイヨモギを胸に貼れ」

「この葉は、芽ちゃんのものだ」

僕は芽ちゃんをすきだ。

「愚かな。芽ちゃんはお前をすきで胸を燃やしている。お前が先に死ぬのか  
見えない血が床を染め、僕は動けない。」